

## 投運動の発達に関するモルフォロジー的研究

### —児童期を中心に—

八島広至(小学校課程・保健体育副専攻)

#### <序論>研究動機及び研究目的・研究方法

子どもの頃から球技を続けてきたが、一体どのようにして投運動は発達してきたのだろうか。また、ハンドボールにおいても、現在では入部当初とは比べものにならないくらい遠投力が身についている。これは、単に投げるための筋肉の増量だけではなく、練習の中で投運動が発達したのではないかと考えることができるのではないだろうか。また、運動初心者の運動発達の過程は、子どもの運動発達過程に似ていることから、子どもの運動の発達を見ていくことによって、運動初心者の習熟過程を知ることができるのである。実際の運動経過を詳しく見ていくにあたり、マイネルのモルフォロジー的考察法を用いて研究を進めていくことにする。また、運動経過の質を見るためにマイネルの諸カテゴリーを用いて運動経過をいわゆる客観的なもの、本質的なものにし、運動経過の諸徴表を浮き彫りにしていく。

#### <本論>

##### 第一章 投運動の特性論

実際の投運動経過を見ていくには、運動記述ということが必要になってくる。運動記述は、主観的に見た運動経過を隠語的表現、比喩的表現によって記述される場合が多い。しかし、シンフォニーは言葉では表しきれないという言葉にもあるように完璧な運動経過の記述はできない。主観的に記述された運動経過を、いわゆる客観的なもの、本質的なものにしていくために、マイネルの諸カテゴリーが必要になる。諸カテゴリーとは、①運動の局面構造②運動のリズム③運動の伝導④運動の流動⑤運動の弾性⑥運動の先取り⑦運動の正確さ⑧運動の調和の8つである。様々な運動によって際立つカテゴリーは異なるが、全てのカテゴリーが協調して運動の出来栄の質が良い運動となるのである。

##### 第二章 年齢別からみた投運動の発達

マイネルは、児童期を小学校低学年と、少年少女時代の最適学習期とに分けている。小学校低学年とは、就学前の6歳から8歳まで、少年少女時代の最適学習期は、9～11歳、12歳である。これは、小学校中、高学年にあたる。小学校低学年における投運動は、準備局面、主要局面、終末局面の局面構造は途切れ途切れになり、経済的、合目的な投運動であるとはいいがたいものである。少年少女時代の最適学習期における投運動は、大人の普段行う投運動に限りなく近く、経済的、合目的な投運動であるといえる。また、捕と投の運動の組み合わせも、練習をしなくても回を追うごとに出来栄の質が高くなっていく。これは、この時期の特徴的な即座の習得と呼ばれるものである。

##### 第三章 投運動の発達に関する印象分析

印象分析とは、スポーツの運動経過をその現実に行われている姿のまま、しかも目だけで観察し、運動現象に表れている諸徴表をとらえることである。また、印象分析を進めていくにあたり、他者の運動に共感し、運動を見抜く力も大切である。実際にある児童の低学年、高学年の投運動を印象分析した。分析の視点として、諸カテゴリーの中の局面構造、伝導、先取り、正確さを用いた。低学年における投運動は、局面構造は途切れ途切れであり、力はしっかりとボールまで伝導せず、経済的、合目的な投運動は見ることができなかった。それに比べ、高学年における投運動は、局面構造はスムーズであり、力の伝導もしっかりと行われ、経済的、合目的な投運動を見ることができた。捕と投の運動の組み合わせは、ボールを捕る時にはすでに、投げる動作が先取りされ、スムーズな局面融合を見ることができた。

#### <結論>

人間の運動は、ある順次性をもって発達する。投運動においては、まず、物を把握することから始まり、何回も物を移動させようとする過程のなかに、物を投げようとする導入動作が行われ、やがて、ほうり、投運動へと発達していくのである。マイネルの諸カテゴリーはどんな運動にもあてはまるものである。他者の運動に共感し、運動を見抜く力を養い、本研究をもとにこれからの運動指導に役立てていきたい。

(引用、参考文献省略)